新刊紹介

"I love my books as drinkers love their wine; The more I drink, the more they seem divine."

日本現代文学全集14「内村鑑三集—附　キリスト教文学」　東京・講談社、A5判四四六頁、定価五〇〇円。

全部で百冊以上の大全集中の一巻。内村鑑三集に植村正久と新島先生の文集を添えたもので編集は亀井勝一郎。新島集は編集者から与えられた頁数内に　○同志社設立の始末　○大学設立の旨意　○説教筋書二篇　○書翰二十通　○一致組合両教会合併問題について　○詩十二篇を社史史料編集所が選び、全生涯を通覧するための伝記的年譜と参考文献を併せて収めた。わが仏尊しの立場からは、新島襄集に内村、植村文集を添えるのが本筋だというであろうが、第三者の企画では、広く、永年月にわたって筆陣を張り、既に大量の全集が一流書店から広く流布されている内村、植村の方を主にするのは当然であろう。残念ながら新島書簡が広く大衆の眼に触れたのは、このたびが始めてといってよい。岩波文庫『新島襄書簡集』も今までの重版合計僅かに四千部で、戦前刊行の大書簡集は五百部であった。伝記や言行録も大部分は自己陶酔的な私版が多く、国内に広く流布の資格に欠けた。新島先生去って七十四年、広く世に理解されない原因がこんなところにあったことを深く反省せねばならぬ。このたびの書簡僅に二十通の新島集は形において極めて貧弱であるが、全国に多量に流布のルートに乗ったことに意義がある。これにより始めて新島襄に接した或る文芸人が、あふるる誠意と深い人間味に感銘し、新島襄の手紙は異彩を放っている、と話したときく。ただ遺憾なことは、本集に添えた大内山梨大助教授の解説は、植村正久の新島観にとらわれて、基本的な理解に達せず、解説書の資格を欠く。

留岡清男著「教育農場五十年」　東京・岩波書店、B6判三二八頁、定価四五〇円。

本書は北海道紋別郡遠軽町にある北海道家庭学校の創立五十周年を記念して刊行された。著者は同校校長であり、創立者留岡幸助翁の四男にあたる人である。

北海道家庭学校は、いわゆる非行少年を教育する学校である。創立者の留岡幸助翁については本誌第二号の人物誌でとりあげているが、岡山県の出身で同志社神学校を卒業後、刑務所改良、刑余者保護、少年感化事業等に尽力し、日本社会事業の草わけともいえる人。大正三年、彼は北海道に千町歩の原野を確保して家庭学校を創設し、「能く働き、能く食い、能く眠るという三能主義」を基本として、非行少年の教育にあたった。以来、昭和九年に死去するまで彼はそこをキリスト愛の実践の場としたのである。その後、同校を支えてきた人々には故牧野虎次、今井新太郎氏ら同志社関係者が多い。

本書の第一章「創設」は、幸助翁が雑誌や本に書いたものを引用しながら、幸助翁

の生涯と家庭学校創立の由来をのべ、第二章「復興」は、著者が経営を担当してからの苦心談、同校の教育や指導方針を書いた文章、生徒たちの感想文および卒業生たちのその後の生活を調べた報告書が収められている。第三章「前進」は、同校の内容の充実と同校をめぐる近隣農家の生活と生産の水準をひきあげることについての希望と計画がのべられている。

この本は、いわゆる面白く、気楽に読める本ではない。だが今日、非行少年の問題が大きく取りあげられているおり、同校五十年の歴史は、そうしたことがらに関心をもつ人々にはいろいろな問題を投げかけるであろう。

井口海仙（校友）**著「家元周辺」**　京都・淡交新社、A5判二〇八頁、口絵写真一六頁挿入写真六四枚、定価五〇〇円。

茶道家井口氏の随筆集で、家元とは裏千家を指し、三部から成っている。一は小川頭を中心として東は寺町西は北野、北は北大路南は今出川の区域内に在って案外知られない旧蹟習俗を紹介した「家元界隈」。二は「茶道手控え帳」三は「折々の記」。歴代千家の宗匠中最も著書の多いのは過般急逝の淡々斎宗匠であろうが、これは茶道の奥義に関するものが大部分で、随筆に到っては淡々斎宗匠の令弟井口海仙氏を第一に挙げねばなるまい。派手ではないが、淡淡と述べてゆく文章も流麗で、しんみりと読ませるのはやはり筆者の年輪の厚みである。新聞、雑誌に発表されたもののうちから六十八篇を精選している。同志社も西陣に進出したから、裏千家周辺は同志社周辺にも通じる。同志社人の一読をすすめる。

（R・T）

「信愛」　上京区丸太町日暮西入上る、信愛保育園、B6＝二頁、非売。

京都―恐らく日本の―幼児保育事業の草分け、信愛保育園が大正三年創立されてから経営に苦難の径をたどりながら社会へ大きな奉仕の足跡を印し五十年を迎えた。本書はその回顧と業績を簡明にしるしたもの。創立者園部マキ、現園長園部道両氏とも同志社出身。創立者は明治三十八年同志社女学校卒業、渡米して小児看護を専攻し、社会福祉施設、病院を視察して明治四十二年帰朝、同志社女学校に教鞭をとるかたわら、産婆看護婦塾を開き、塾生と共に西陣地区の人達に奉仕するうち、分娩後間もない母親の重労働、不衛生な環境、育児知識の欠除、栄養不良の現状を目撃し、幼児保育に併せ母親教育の必要を痛感した。これが保育事業開設の原因である。大正三年画家園部逸堂氏と結婚し、よき協力者を得て府下最初の保育園「信愛保育園」を開いた。創立者は五十年祝賀の佳日を待たず昭和十九年病を得て世を去ったが、その生涯は神と人道へのひたむきな奉仕で満ち、代表的同志社人の一人である。

ゑはがき二題

●一は**中井汲泉**（本名・政次郎、校友）**氏作**、わびすけ染の京都風物に関するものを絵葉書に色刷複製したもので、五枚一組一〇〇円を二種。駅前タワービル二階の「わびすけ」で発売。

●二は本誌のカットにも度々なっている稲垣稔次郎作京名所版画を絵葉書にしたもので一枚売り六〇円。発行所は京都壬生、三雲木版社、社長**石原美夫**（理雄、校友）、駅前タワービル二階「三雲」で発売。

（R・T）